

「いうに言われぬ」という言葉がある。普通の言葉では言い表せないもの。そのときが詩の出番だ。今月はそんなことを意識してみた。

ストローの袋を幾重にも折って

水滴垂らす

明日も四時起き

作者 まちりこ（埼玉県）

——何でも無い仕草。所在ないのか、そうでないのか。辛いのか、辛くないのか。身体と心は何処にいるのか。人は時々そんな仕草をする。

死ねばいい

※これは個人の感想です

作者 まちりこ（埼玉県）

——メディアが発する言葉は時々奇妙だ。表現の凶悪さに、とぼけた注釈という「新しい」組み合わせ。

角砂糖の角をかじって舂って言う

作者 細村 星一郎（東京都）

——角を「かく」と読むか「かど」と読むか。そんなことで、春が来ることもある。春を呼んだのかも知れない。

春だねだったか針金だったか

言いのこして消えた

作者 藤色（京都府）

——音になり損ねた言葉。あるいは言葉になり損ねた音。しかし場面がある。「言い残した」という記憶もある。十分ではないか。

最近の兎の切手糊弱い

作者 風船（東京都）

——切手の出番は少なくなった。ことに2円という切手は限られた用途しかなく、兎も肩身が狭い。心なしか糊さえ弱くなったようだ。

僕はこの色を

そう

黒と呼んだ

作者 降旗 沃（東京都）

——色くらい主観性の強い物はないだろう。「白を黒という」などという言葉さえある。「僕」が、「黒」と呼んだからこの色は黒になった。「僕は」から「僕が」まで、その一筋縄ではいかない変化と時間の成り行きを「そう」という一言が語る。

花の名を

たくさん知ってる

いじめっ子

作者 翠（東京都）

——いじめというものが持つ繊細な一面を、完璧なフレーズで表現した。

木の幹をゆっくり剥いでいくよう

にしずかな時間です 走馬灯

作者 白野（新潟県）

——過去を振り返るのは時に痛みを伴う。しかし樹皮を剥がされた痕跡のように、記憶は容易には消えず、繰り返し浮かび上がる。

お魚くわえた飼犬

泥棒だ

作者 加藤 美紀（愛知県）

——ドラ猫なら、お魚を横取りするのは生きること。しかし飼犬がそれをやると泥棒になる。昨今のあちこちに、いや中枢にも？